



TITLE:

<批評・紹介>近世支那の倫理思想 吉川幸次郎著

AUTHOR(S):

小畑, 龍雄

CITATION:

小畑, 龍雄. <批評・紹介>近世支那の倫理思想 吉川幸次郎著. 東洋史研究 1942, 6(6): 467-468

ISSUE DATE:

1942-02-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145755>

RIGHT:

されたのは何故であるか。それは全く支那史學の倫理的性格がこゝに至らしめ、最後に朱子の正統論の如き道德主義に歸結したのであると説かれる。かくしてこの論文の前半と後半とが結び付けられる。けれども支那史學の倫理的性格として説かれる勸誡主義のみから正統論を理解することは困難であらう。國家についての倫理思想を考へねばならぬであらう。

本論文は重要な中心問題を捉へて、それより逸することなく、極めて要領よくまとめられてゐる。しかしそのために、書かれてゐる限りでは論旨が明かであるけれども、まだ問題の中核に何か残つてゐるやうである。

近世支那の倫理思想

吉川幸次郎著

岩波講座倫理學第十二冊

この論文を読む前に、題目を見て二つの豫想をした。第一は近世支那とは、唐の中頃から轉換期に入り北宋に完成されたと考へられるだらうといふこと、第二に、その倫理思想とは、近世の社會から

生み出され、そこに生きてゐた倫理思想のこと、具體的には、國家倫理、家族倫理の觀念が如何なる内容を持つたか、また個人や社會を如何に考へたか、さういふことが述べてあるのだらうと豫想した。が實は第一の豫想は當つたけれども第二の豫想ははつれた。

近世を唐の中頃以後、阿片戰爭頃まで考へることは、定説ではないけれども有力な説である。この時期の倫理思想として、著者の取上げられたのは、「經」への復歸、といふ思想である。何故この思想が起つたのか、といへば、中世の生活に混亂があつたから、と説かれる。つまり中世の生活の混亂は政治の混亂を反映したもので、その混亂を救ふためには、混亂以前の古代の生活に復歸するがよいと考へられ、そこに「經」への復歸が求められる、といはれる。巧妙な説明であるが、近世社會を特徴づける市民の進出といふ現象と「經」への復歸の要求の發生との關係はわからない。かくして最も古いものを最も倫理的だとする思想に一定し、「經」への復歸が近世の倫理として確立した。

しかしそれは、古代の生活と今の生活を合致させることは不可能だから、意識的無意識的に現實と調和するものであつた。それは「道學」に於て最もよく見られる。朱子の思想は「經」の再現であり、しかも「經」そのまゝの再現ではない。現實との調和による變更を自覺しつつも、「經」の重要な點を中世の隱微から再び明かにしたところに、復歸の意識の満足がある。かくして朱子學が近世の學問の正統となつた。

この「經」への復歸といふ思想は何故近世を貫く倫理となつたか。それは近世の社會に適するから、と説かれる。官僚を市民から選ぶ科擧の制度と結びついてゐるからである。中世の煩瑣な倫理にかはつて「經」が市民の知識階級の倫理となつた。しかも「讀書の家」の固定とともに、近世の倫理は安定した。つまり、近世の倫理は、市民の進出といふことからではなく、中世の生活混亂の自覺から起つたのであるが、それがこの近世社會に適したのである、と云はれるやうである。

その近世の倫理は、倫理としての力を

徐々に失つて行つた。何故かと云へば、近世社會の現實は、「經」との調和の限度を超えて乖離して行つたから、と説かれる。それは、先づ市民と「讀書の家」とが交流すること、また中世の貴族の倫理の外にひそんでゐた風習が、倫理の世界にもち來され「經」の批判を受けたこと、更に異民族の勢力の増大などの事情から、現實は「經」にそむく相を提示し、倫理

の確信を失はせることとなつた。そこで王陽明の如きは「經」への復歸の理想を捨てようとしたが、それは倫理の自殺として否定され、清朝の「經學」は、「經」への復歸の最後の努力をなした。がそれも不十分なところへ、西洋文明が襲來し「經」への復歸の倫理は絶望を告白した。しかしそれに代るべき倫理はなほ發見されない。

以上簡単に紹介したが、要するに本論文は、近世の倫理思想として「經」への復歸といふことを捉へ、極めて巧妙に、しかも論旨がわかりやすく表現されてゐる。けれども讀者に用意がなければ、言葉はわかりやすくても、内容はやはり難しいであらう。

〔小畑龍雄〕

「蘇州の夜」といふ映畫をみて

昨年の暮、松竹大船の「蘇州の夜」といふ映畫をみた。佐野周二と満映の李香蘭とが主演であつた。上海の或孤兒院に年若く美しい頑固な排日家の保姆がゐたが、或機會から一日本人醫者の熱烈な獻身的行爲に感じ轉向して急激に日本に接近した、その結果二人の間には熱烈戀愛が結ばれたが、彼は女の許嫁の心情を憐んでその戀を譲つてやつた、といふのがそのあら筋である。

元來かういつた現地ロケーションの映畫は、國策映畫と文化映畫とをも兼ねたもので、大陸の正確な現状を内地の人々に知らせるといふことも重要な役目であらう。さうして映畫によつて支那に對す

る認識を深め、支那をよりよく理解する一助ともするところに、所謂の現地ものの一の意義もあらうと私は思つてゐた。しかし、この期待は全く裏切られ全體に支那らしい雰囲気のないものにこの上もなく失望せざるを得なかつた。

全體の筋はしばらく措くとしても、いろんな點で餘りにも非常識なことが多いのが氣にかかる。例へば、今時上海から蘇州へ行くのに、殊に蘇州にチプスが流行しそれを救護に行くといふ場合、悠々と戎克でクリークを漕つて行くやうなものとは絶對にあるまい。立派な急行列車があるのだ。また治療班に治療を受けた老婆が、謝々謝々といつて頻りに頭を下げてゐるが、支那人はこんな禮の仕方はしない筈だ。これは日本式の支那語である。それから自分の戀人を奪はれたと信じた

女の許嫁が戀敵の日本人を狙撃して失敗する、そのあたりの單調さには、全く見るものをして冷汗をかくしめる。この作者のやうな單純な心を以てしては、到底支那人を理解することは不可能であらう。あくまで陰險な執念深い手段を弄するところに彼等の眞髓があり、むしろ全篇の中心はそこに集るであらう。

要するに、かかる映畫は日本人に見せて益なく、支那人に見せて物笑ひの種となる。これを支那語版によつて、我國の眞意を支那の大衆に訴へ、彼我の文化提携を計り東亞新秩序建設に資せんと望むが如きは、實情に最も迂なるものであらう。映畫人は各方面の支那學者支那研究家に協力を求め、當局者はこれに對して適當な指導を與ふべきである。(T・H)